（海外・国内）インターンシップ報告書　　2019 年 7 月 13 日提出

氏名	豊巻　治也
所属	毒性学
学年	D4
活動先名	WHO Western Pacific Regional Office (WPRO)、フィリピン
期間 ①　（出発日―帰札日） ②　(インターンシップ実施開始日―終了日)	①　2019 年 05 月 04 日- 07 月 14 日 ②　2019 年 05 月 20 日- 07 月 12 日

・活動目的及びインターンシップ先を選択した理由

これまで研究活動を通して、研究成果を現地にフィードバックすることの難しさを痛感してきた。また、調査地域だけでの活動に留まり、他の同じような問題を抱えている別の地域へ活動を波及させることにも限界を感じている。そのため、研究者だけでなく他の関係機関との連携、異なるアプローチでの問題解決の必要性を感じ、国際行政機関でのインターンを志望するに至った。私はヒトの健康問題に関心があり、特に幅広い地域で活動している機関で働きたいと考え、WHO WPRO でのインターンを選択した。WPRO では現在選考している毒性学にも関連する化学物質の食品汚染等に関する Food Safety ユニットでインターンを行った。

・活動内容・成果（2,000 字程度、活動内容が判る様な写真や図表を加えて下さい）

インターンは 2 ヶ月という短い期間であったが、様々な業務を経験することができた。

食品中の薬剤耐性菌のモニタリングシステム：

現在世界中で薬剤耐性菌が問題となっているが、WPRO 地域でも例外ではなく、特に医療技術が遅れている発展途上国では猛威を奮っている。薬剤耐性菌による食肉などの汚染が大きな注目を集めており、薬剤耐性菌のモニタリングシステムが十分でない WPRO 地域の途上国をターゲットした、薬剤耐性菌モニタリングシステムのファ

クトシートを作成した。

日本、アメリカ、ヨーロッパなど、先進国の現状のモニタリングシステムの概要及び利点をまとめるために情報を集め精査した。また、モニタリングシステムの整備に力を入れている途上国として、南アフリカ共和国の取り組みもまとめた。WPRO 地域の国々がモニタリングシステムを整備していく際の指針となるように、ファクトシートの作成に努めた。

フィリピンの食用酢製造問題：

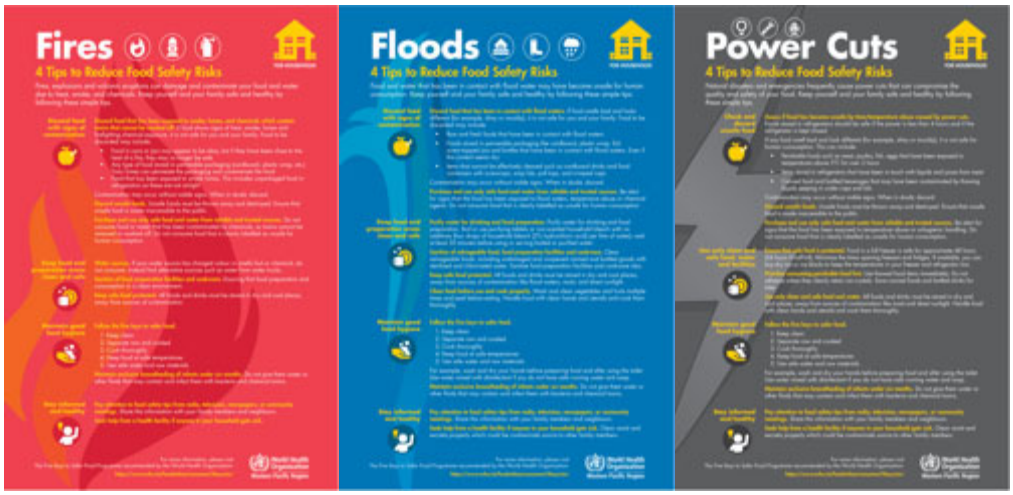
インターンを初めてすぐの頃に、フィリピン国内で販売されている食用酢の大部分が化学的に合成された酢酸から製造されていることが、政府の研究機関の調査により判明し、大きな社会問題となった。それを受け、フィリピンの WHO のカントリーオフィスから助言を求められた。この件は早急に対応する必要があり、他の仕事の手を止めて、第一優先で作業にあたった。

世界各国の酢の製造方法及び規則や、食品製造委員会（CODEX）が定めている規則の情報を収集し、ショートレポートとして 2 日間でまとめた。調査の結果、食品グレードの酢酸からの食用酢の製造は世界的に広く行われている事がわかった。短時間で沢山の情報を取捨選択するのは非常に困難な作業であったが、WHO が担っている仕事の重要性を感じた。また、自分が普段何気なく口にしている食べ物にも様々な製造方法や規則があることを知る良い機会となり、大変勉強になった。

食品安全を維持するための災害時配布用リーフレット：

WPRO 地域は世界的に見ても洪水や地震など災害が多い地域として知られている。これまで災害時などの対応をまとめたガイドラインなど作成されてきた。しかしながた、2016 年のフィジー諸島での台風被害など災害時に現状のガイドラインは現場では使いづらいことがわかり、災害時にも利用しやすいファクトシートの作成に携わたった。

Supervisor が既にコンサルタントと火災、洪水、停電の災害時の雛形を作成しており、内容の精査や文章の構成などを確認した。文章の構成など研究の申請書などで学んだこと活かし、よりわかりやすい文面に変更することができた。また、インデントや文字のサイズなどの体裁を整える細かい作業は特に注力したが、そういった細かい点にも配慮できるのは日本人の気質であり、国際機関で日本人として働く上で重要な要素だと感じた。また、人々に注目してもらえるようなデザインをデザイナーと検討した。インターン前には災害用のリーフレット作成を予期していなかったが、WHO で求められる仕事の幅を知る良い機会であり、また内容としても非常に興味深いものであった。



WPRO 地域用の食品検査ガイドライン：

WPRO 地域の Food Safety レベルの底上げを目的とした食品衛生管理者向けの食品検査ガイドラインの作成に携わった。こちらもリーフレットと同様既に雛形が出来上がっており、内容の確認・修正を行った。Annex なども含めると、8 つの書類からなり、それぞれを確認しながら内容をすり合わせる必要があり、複雑な作業となった。読み手が理解しやすい構成などを Supervisor と相談しながら編集し、また細かな体裁の修正なども行い、より読みやすくわかりやすいガイドラインの作成に貢献することができた。どのようにフィールドレベルで有効に利用してもらうかなど課題はあるものの、1 つのガイドラインを作成することにより、地域全体に効果を波及できる点は WHO など国際行政機関のやりがいの 1 つだと感じた。

その他の活動：

私がインターンを行った Food Safety ユニットは Division of Health Security Emergency に所属しており、Division の Weekly 及び Monthly Meeting に参加した。Emergency ユニットの WPRO 地域内での様々な疾病の発生に関する発表を聞く機会が多々あり、別のユニットの活動を知る良い機会となった。

インターン生を対象とした授業やイベントにも参加した。マニラ市内の幼稚園の自動を対象にした健康増進プログラムでは、他のインターン生と共に手洗いや歯磨きを推奨する授業を行った。

また、WPRO で開催された会議にも出席した。WHO の関係機関の連携を高めるために開催された Partner Forum では、Youth session のメンバーとして参加し、パネルディスカッションを行った。WPRO の Regional Director である葛西先生と直接ディスカッションでき、貴重な経験となった。

・今後のキャリアパスを考える上でどのようにプラスになったか。

WHO WPRO オフィスは Food Safety ユニットだけでみても地域一帯の様々な問題に対して複数の方法を用いて活動しており、より幅広い視点でのアプローチを学ぶことができた。研究成果を当該地域だけでなく、他の地域へも波及させるにはやはり国際行政機関との連携は不可欠であると感じた。特にガイドラインなどの枠組みづくりは研究とは違った面白さや重要性があり、インターンを通してそのやりがいを学ぶことができ、将来的に国際行政機関で働くというキャリアパスを現実的な目標として考えられるようになった。一方で、国際機関で働くにはまだまだ自分の英語力が足りないことがわかり、良い刺激になった。

・後輩へのアドバイス

WHO で獣医師として関われる仕事は感染症に関連した部門だけでなく多岐にわたり、私が所属していた Food Safety 部門などでも獣医師のバックグラウンドがあれば十分インターンを行えると感じた。専門分野のポストがなかったとしても、自分の経験やバックグラウンドを活かせるポストがあれば、先入観にとらわれずインターンを行うことは良い経験になり得ると感じた。

指導教員確認欄	指導教員所属・職・氏名 毒性学教室・教授・石塚　真由美